
want be you

塩さん。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

w a n t b e y o u

【Nコード】

N 2 1 7 3 Z

【作者名】

塩さん。

【あらすじ】

誰も知らない。

彼らのホントウのスガタを。

いや、彼ら自身も気づいていない。

ただ、それに気づいたとき。。。

桜の花びらがひらひらと舞う頃。

「あゆとーっ！はやく行こっぜー！」
「おうっ！」

そう言っつて威勢よく家を出た。

その少年の名は

はやかわ
早川 あゆと
亜優都。

中学1年生。

まだ、学ランに着られているようにしか見えない。
つい最近までランドセルを背負っていたのだから。

そのあゆとを誘ったのは幼馴染の

わか
和賀 せいた
星太。

あゆとの近所に住んでいて、幼いころから何をするにも一緒だった。

今日はそんな二人の新たなスタートの日。

入学式の日だ。

「やっと終わったよ．．。」
「あの校長話長いわ．．。」

なんて長い式を終えて二人は少しませた会話。
新しい制服。

新しい鞆。

新しい教室。

顔見知りではない生徒たち。

全てが彼らを大人に魅せようとしていた。

「にしても．．みんな賢そう．．。」

「何言ってるんだよあゆと！今更戻れねえよ？」

不安そうな亜優都にいたずらっぽく笑ってみせる星太。

彼らが手にする鞆には

私立宇銀鷹高等学校附属中学校

の文字。

そう、二人が通うのは日本でも指折りの名門エリート学校。
高校へはエスカレーター式である。

今日から6年間、この学校で2人は青春を過ごしてゆく。

「やっぱ俺が受かったの間違いじゃ．．。」

そう後ろへさがる亜優都の腕をつかんで星太は言う。

「ばーか！早くいくぞ！」

散ってゆく花びらは語る。

その笑顔が、無邪気な笑顔が。

いつしか”アイツ”に支配されることを。

そして互いの本当の姿に気づいてしまうことを。

「じゃあ、明日からさっそく授業が始まりますので．．」
教室での担任による話が終わろうとするころ。

亜優都は、ひとりの生徒に熱い視線を送っていた。

少し明るめの髪。

大きな瞳。

そのすつとした顔立ちは星太に似ている。

その生徒の名は

黒相 隼人

きつとモテるんだろうなあ．．

先生の話なんて耳には入らずに隼人をじっと見る亜優都。

．．．。

「おいっ！おいっ！」

「あっ、え！？ああどうしたの？」

星太の声で現実へと引き戻される。

「どうしたの、じゃねえよ。もう先生の話終わってるし。」
そう苦笑される。

「どうしたんだよ?」

「いやあ、あの子。黒相くん? だっけ。なんかモテるんだろうなあ
って思ってる。どことなく顔は星太に似てるよね。」

「そう? まあ、モテそうだよな。」

そう話していると、2人の視線に気がついたのか隼人がこちらへと
歩み寄ってきた。

「俺、黒相 隼人っての。よろしくね!」

さわやかな笑顔。

2人も同じような自己紹介をしたあとにしばらく新入生らしい会話を
をした。

「そういやさ、星太と隼人って似てない!？」

「そうかなあ...。」

星太と隼人が声をそろえる。

「まあどっちもイケメンなんだよ。」

そう笑うと

「んなことねえよ。」

ってまた声をそろえていった。

「じゃ、また明日ね!!」

そう言って、隼人は2番ホームへ。

星太と亜優都は4番ホームへと別れた。

「よかったな。一応友達できたし。」

電車の中で星太が言う。

「うん。最初はめちゃくちや緊張したけどね。」

そう苦笑して窓の外の流れていく景色を見つめる亜優都。

その日からすごい速さで毎日が過ぎていった。

星太、亜優都、隼人はいつも3人で行くようになった。
部活も3人同じ、陸上部に入った。

新人戦も間近にせまった秋。
冷たい風が少しずつ強くなってゆく。

「隼人ー！星太ー！ちよつと来い。」

乾いたグラウンドに監督の低い声が響きわたる。

「はいっ！」

と入部したときに教えられた返事をし2人は監督のもとへ。

「隼人、星太。次の新人戦だがな……。」「

真剣な面持ちで話す監督。

他の部員はまだ走っている。

2人の息はまだあがっている。

「実は、ここ数年、入賞したことがないんだ。」

そう句読点をたくさんつけて話す監督。

動かない監督は少し寒いらしい。

「だが、今年は入賞をねらっているんだ。お前ら2人はまれにみないほどの好成績を練習で残している。他の部員には言えないが、正直、お前ら2人にしか今年は期待をしていない。」

星太と隼人はグラウンドで走っているほかの仲間が気になった。そんな二人の気持ちを悟ったように監督があわててつけたした。

「もちろん、まだ新人戦だからこれから伸びるやつもたくさんいるだろう。他のやつにも期待はしているんだ。」

今さらつけたしても2人の複雑な気持ちは中途半端に残っているのだが。

「とうわけだから今度の大会に向けて、練習はいつも以上に力を入れるんだぞ。じゃ、練習続けてこい。」

そう言って監督はかさついた両手をこすりあわせた。

「ありがとうございました！」

そう大きな声で一礼したあと仲間の走る中に合流していった。

星太は幼いころから一緒の亜優都に少しうしろめたさを感じながら風をきって走った。

「お前ら、何言われてたの？」

練習が終わり駅まで歩いていく道中。

ふと吹いた風が3人の汗を乾かしてゆく。

「うん。ああ．．ちゃんと練習しろって。」

そう歯切れが悪そうに隼人が言う。

星太は複雑な瞳で隼人を見つめた。

今まで、亜優都に嘘などついたことがなかったからだ。

でも、正直に話すのも少しかわいそうな気がしてこのまま隼人にまかせてしまおうと思った。

「ふーん。ま、エリートさん達のことだからどうせ新人戦期待してるぞー、みたいなことでしょ？」

ひいていたはずの汗が星太の頬にたれる。

「うっうん。まあね。」

もう正直に話そう、そう思って口をひらくもかすれた声しかでなかった。

「さっすがだよ〜。がんばれよ！うん。俺も頑張らなきゃなあ〜。」

「

それにもかかわらず、明るく笑う亜優都。
やっぱり、そんな亜優都が痛々しくて隼人と星太は暗めの空を見上げた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2173z/>

want be you

2011年12月14日21時14分発行